

## 2022年度SPIO Award

SPIO Award は、毎年 Auris Nasus Larynx(ANL) に掲載された原著論文の中より、優秀原著論文1篇に対し、その著者に賞状と賞金(50万円)を贈呈しています。(ただし、筆頭著者は45歳以下) また、受賞者には日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会・学術講演会において講演の場が与えられます。これは平成13年から始まり令和3年までに22名の受賞者を選出しました。

2022年度は、掲載された原著論文113編の中から候補対象となる63編を英文誌委員会のメンバーで審査し、最終的に SPIO Award 候補論文として5編が推薦されました。その後 SPIO 選考委員会および理事会で選考した結果、東北大学 吉田拓矢氏が選ばれました。

Takuya Yoshida: Investigation of the diversity of human papillomavirus 16 variants and L1 antigenic regions relevant for the prevention of human papillomavirus-related oropharyngeal cancer in Japan.  
ANL Vol.49, No.6,1033-1041, 2022

## 令和3年度曾田豊二SPIO奨学金受領者(カナダより)

京都大学 奥山英晃氏

2021年10月よりカナダ、ケベック州モントリオールにある McGill (マギル) 大学、Voice & Upper Airway Research Lab で Postdoc fellow として研究留学しております。

マギル大学はカナダで最も歴史がある国内有数の名門校として知られています。私の所属する研究室は、香港出身の Dr. Nicole Li-Jessen を PI とし、大学院生を含め総勢約15名が所属しています。研究内容は iPS 細胞や頭頸部癌細胞を用いた研究の他、発声障害の疫学研究や表面筋電図を用いた Vocal fatigue の解析など、主に喉頭に関する幅広い領域に渡ります。ラボミーティングでは、若い研究者のプレゼンテーションスキルの高さにいつも刺激を受けています。留学当初は、感染予防のためオンラインでしたが、昨年秋の新年度からは会議室で行われるようになりました。私は現在、ナノハイドロゲルと間葉系幹細胞を用いた頭頸部骨格筋再生の研究を行うとともに、共同研究先の一つであるマギル大学機械工学部の Dr. Luc Mongeau 研究室で開発された新規生体材料による声帯損傷の治癒効果をみるウサギの動物実験を開始しています。動物実験ができる、あるいは解剖の知識のある外科医が貴重なようで、上記以外にも声がかかって参加しているプロジェクトがいくつかあって、日を追うごとにやるべきことが増えてきています。こちらの研究者は、学部が違っても研究室間の垣根が低く、各分野の専門家へのアクセスが良いこと、また共同研究が非常に盛んであることが印象的です。言わずもがな語学力は重要で、討論の際には自分の意見がうまく伝わらない、相手の質問の意図が理解し切れない、といった場面は日常茶飯事で未だに苦労しているところではあります。臆せず継続あるのみと思って積極的に議論に参加するようにしています。

カナダ第二の都市であるモントリオールは、ケベック州の公用語であるフランス語が第一言語で、街中の至る所でフランス語を見聞きします。公共交通機関やレストランのメニューなどは基本フランス語なのですが、地元民の多くは英語も流暢な英仏バイリンガルです。店では、“Bonjour-Hi!” (必ずこの順です) と声をかけられ、Hi! と返事すれば英語で対応してくれます。モントリオールの大学はフランス語を主言語とするところが多い中、幸いマギル大は英語ですので研究生活ではフランス語に困ることはありません。英語を母国語としない人が多いためか、私の拙い英語にも寛大な方が多く大変助かっています。また、フランス文化を感じる石畳の美しい街並み、食に関してはお洒落なカフェやスイーツが充実しており、“北米のパリ”と呼ばれたりもするそうです。一方で日本食品を販売するアジア食材店やレストランも多く、治安も良く子育てしやすい環境が整っており、家族にとっても住み良い街だと感じています。

モントリオールは冬の寒さが厳しく、-30°C 近くになる日が年に数日あります。睫毛が息の水分で凍り付き、鼻水が3分でカチカチに凍った経験はカナダの地ならではのものです。春が近づいてくると、冬の鬱憤を一気に晴らすかのように皆一様に浮足立ってきます。初夏の気候は実に爽やかで、週末は家族と公園などに外出して過ごすようにしています。

研究活動、日常生活のどちらにおいても、マイナートラブルは多々経験していますが、同僚や上司、家族の助けを借りてなんとか乗り越えて今に至ります。異国の地に身を置き、多様な文化やバックグラウンドを持つ人たちと関わる生活を送ることを大変有難く感じております。このような貴重な留学を曾田豊二 SPIO 奨学金にてご支援いただきました国際耳鼻咽喉科学振興会に心より感謝申し上げます。



PI の Nicole 先生 (右から2人目)  
筆者 (右端) とラボメンバー



ランチタイムに賑わう大学キャンパス